

マティアス・ゲルツァー著

長谷川博隆訳

### 『ローマ政治家伝』Ⅲ キケロ

名古屋大学出版会 二〇一四・九刊

A5 五二八頁 五五〇〇円

本書は二〇世紀を代表するローマ帝国共和政期研究の大家マティアス・ゲルツァーによる『ローマ政治家伝』シリーズの第三巻であり、共和政ローマを代表する人物、キケロの生涯を辿る。先の『ローマ政治家伝Ⅰカエサル』『ローマ政治家伝Ⅱポンペイウス』に続き、長谷川博隆氏による翻訳である。本書は全一五章で構成される。第一章ではキケロの修行時代を概観し、キケロの代名詞たる修辞・弁論術がいかにして身につけられたのかを説明する。続く第二章から第五章までは類まれなる弁論の才を武器に官職の階梯を上昇するキケロの様子を描く。第六章と第七章はキケロの絶頂期ともいえる執政官職時代。第六章と第七章はキケロの陰謀を鮮やかに暴く様子が語られる。名実ともに「市民団の第一人者」として国家の舵取りを一手に担ったキケロであったが、その権勢に陰りが見え始めてくる。そのような時期を扱うのが第八章である。そして続く第九章では、政争に敗れ、亡命を余儀なくされるも、再びローマの政治に帰還するキケロの様子を叙述する。ローマへの帰還を果たしたキケロであったが、もはや国政の手綱は彼の手元にはなかった。第一〇章以降では、彼の政治的苦

境が、同時期に書き連ねられた著作とともに語られる。第一章ではキリキアでの執政官代理職時代を述べ、第二章ではポンペイウスとカエサルが激突した内乱において、両者の板挟みの状態に置かれたキケロの振る舞いに着目する。第三章ではカエサルの独裁官職のもとでのキケロの様子を描き、第四章でそのカエサルの死に歓喜するキケロの様子が叙述される。そして第五章ではキケロの最期が描かれる。

詰まるところ、キケロは優れた弁論家であったが、「大政治家」ではなかった。これが著者の評価である。著者は大政治家を洞察力とそれを前提にした政治的実行力、そして革新性を備えた人物と定義する。キケロには他者の追隨を許さない圧倒的な知識と雄弁があつたが、時代を見抜く洞察力と革新性は持ち合わせていなかった。これは必然とも言える。なぜなら、騎士身分の家系出身ながら、ローマ政界の頂点に到達

したキケロは、自身が標榜した「元老院と騎士身分の和合 *concordia ordinem*」を象徴する存在であつたが、これは少なからぬ支配階層への迎合を意味し、キケロを気高くも、保守的な思想へと縛り付けたからである。著者はキケロの国家論を以下のように指摘する。

「伝統的な、元老院による旧態依然たる共同体国家ローマの支配を、属州を越えて新たに構築されるべき、官僚制機構をともしう統治体へと転換しなければならないという洞察力が完全に欠けていた(三四一頁)。」

その後の歴史が示すように、確かにキケロは政治的に「敗北」

を喫した。とはいえ、彼の思想は後の帝政期はもちろん、現代の我々にまで深い影響を与え続けていることを見逃してはならない。

ゲルツァーの学説が新説にとって代わられて久しい。しかし、膨大な数の史料を精緻に分析し、当時の社会状況を丹念に再構築する本書の価値は、長き年月を経ても色褪せるものではない。研究の道標として今後も重んじられるべきであろう。(阿部 衛)